

# 生 *Seikatsu Bunkashi* 史

## 活文化

< 史料館だより >

### 目 次

本庄村誌囃託 松田直市について.....	大国正美 (2)
	樋口元巳
ひょうごミュージアムフェア二〇一五.....	史 料 館 (5)
深江の村有井戸とNHKドラマ「マッサン」.....	深 江 塾 (6)
深江物語 (6) 昭和20年代の深江浜を歩く (4).....	森口健一 (11)
トライやるウィークと史料館.....	史 料 館 (18)
二〇一五年度のWEBサイトアクセス状況.....	高田祐一 (19)
再び史料館にかかわって.....	潮崎孝代 (19)
史料館日誌抄.....	道谷 卓 (20)
	藤川祐作



2016.3.31  
NO.44

深江には芦屋との境界に村有の井戸があり、戦前には酒造会社に水を提供していた。NHKドラマ「マッサン」の住吉酒造のモデルになった「摂津酒造」である。戦後も工業用水として使われたが、阪神・淡路大震災以降、撤去された。

(1993年4月、藤川祐作撮影)

神戸深江生活文化史料館

本庄村誌囑託

## 松田直市について

館長 大國 正美  
史料部研究員 樋口 元巳

『本庄村史』は、昭和十七年（一九四二）当時の本庄村が本山村在住の元調導・松田直市を囑託として雇用し資料収集を始めたことに出発している。松田直市は二年ばかりの間に、多くの古文書を筆写し、「本庄村誌資料」として八巻にまとめた。このうち六巻目は所在不明だが、残る七巻を昭和五十五年（一九八〇）当時の深江財産区管理委員会長の太田垣止雄氏が借り出して複写し、一部を『本庄村史 資料集』として三巻にまとめ、さらに通史編にも利用した。

このたび、孫の博智氏から松田家の資料を一括して史料館に寄贈いただき図書も含めて整理を進めてきた。このうち古文書を除き概要がまとまった。今回は、これまではほとんど知られていなかった松田直市の履歷と系譜、そして蒐集図書を紹介したい。なお直市、直一の両方の記載があり、諸書に混用されているが、本人自筆の系譜や系図は直市が多いので、本稿では直市で統一した。

## 戦前の郷土史家・松田直市氏の経歴

松田直市は、自ら作成した系譜によると、明治十八年（一八八五）生まれ。ただ家庭の事情があって出生届を一年遅らせた。松田家は代々直左衛門を名乗っており四世直左衛門と通称した。幼名直一郎、後直市。忌名（死後の本名）は博忠。明治三十五年（西宮第一尋常小学校調導、明治三十八年に御影師範学校修了、同年精道小学校調導に



写真1 松田直市（明治43年、26歳）

なり、大正十一年（一九三三）武庫尋常高等小学校代用教員、翌十一年武庫尋常高等小学校調導、昭和六年（一九三一）に四七歳で退職した。翌七年御影町誌編纂委員、昭和十四年本山村誌編纂委員長、昭和十六年魚崎町誌編纂委員長、同年武庫村誌編纂主任となり、同十八年本庄村誌編纂囑託、翌十九年死去した。

松田直市が多くの自治体史に関わったことは知られていたが、『御影町誌』では前書きの中に「昭和九年九月武庫郡本山村、松田直一氏に資料蒐集を囑託」とあるだけである。また『魚崎町誌』では序文に「紀元二千六百年記念事業として編纂することになり、魚崎町より本山村住人故松田直一氏にその編纂を委嘱した。爾來松田氏は熱心に根気よく、資料の蒐集、原稿の執筆に努力せられたが、遂にその完成を見ず辞任せられた。その後太平洋戦争は次第に熾烈となり、町誌編纂の事も中絶状態になったのみならず、松田氏苦心の原稿の一部も、戦災の

ため焼失するにいった」とある。「本山村誌」に至ってはいったん中断して戦後復活しているだけに松田直市の戦前の調査目録記載がない。今回調査した資料には本山村報・木庄村誌資料・魚崎町誌資料・御影町誌編纂日記等の郷土史編纂資料が残されていて、これまで分からなかった戦前の自治体史の調査概要の手がかりがある。詳細については今後検討したい。なお『武庫村誌』は未完だが、民俗調査編が、尼崎市立地域研究史料館の『地域史研究』二〇号、二二号に翻刻されている。なお解題では「明治十九年生まれ」としているが前述のように明治十九年は出生届の年である。

#### 松田家の系譜

さて松田直市は驚異的な記録者で、自らの家系についても古文書などをもとに詳細な記録を作っている。また軸物に表装した系図があり、別掲した。系図から判明するように、直左衛門家は六世・七世松田安右衛門の弟直左衛門が分家して成立した。松田安右衛門家の始まりは大祖父兵衛が、「当村開闢、今芝切喜左衛門前身」とするが、生没年代は判明しない。続く安右衛門（玄住）を大系としており、元禄十五年（一七〇二）に氏神次木正八幡宮（中野八幡神社）の拜殿を建立した時の世話方を務め、正徳元年（一七一〇）死去したとしている。この安右衛門が事実上の初代である。六世安右衛門は年寄役を務めたが終身独身で第七七郎が七世安右衛門となって本家を継いだ。六世安右衛門が年寄役、七世安右衛門も百姓代・年寄役を務めた。以降、安右衛門家は屋敷役や近代になってからは戸長や本山村会議員を務めるなど名

大祖 安右衛門  
 二世 玄住 安右衛門  
 三世 了助 安右衛門  
 四世 弥藤 太  
 五世 了志 安右衛門

六世 保徳 安右衛門  
 七世 三郎 安右衛門  
 八世 直左衛門  
 九世 直左衛門  
 十世 直左衛門  
 十一世 直左衛門  
 十二世 直左衛門  
 十三世 直左衛門  
 十四世 直左衛門  
 十五世 直左衛門  
 十六世 直左衛門  
 十七世 直左衛門  
 十八世 直左衛門  
 十九世 直左衛門  
 二十世 直左衛門  
 二十一世 直左衛門  
 二十二世 直左衛門  
 二十三世 直左衛門  
 二十四世 直左衛門  
 二十五世 直左衛門  
 二十六世 直左衛門  
 二十七世 直左衛門  
 二十八世 直左衛門  
 二十九世 直左衛門  
 三十世 直左衛門  
 三十一世 直左衛門  
 三十二世 直左衛門  
 三十三世 直左衛門  
 三十四世 直左衛門  
 三十五世 直左衛門  
 三十六世 直左衛門  
 三十七世 直左衛門  
 三十八世 直左衛門  
 三十九世 直左衛門  
 四十世 直左衛門  
 四十一世 直左衛門  
 四十二世 直左衛門  
 四十三世 直左衛門  
 四十四世 直左衛門  
 四十五世 直左衛門  
 四十六世 直左衛門  
 四十七世 直左衛門  
 四十八世 直左衛門  
 四十九世 直左衛門  
 五十世 直左衛門  
 五十一世 直左衛門  
 五十二世 直左衛門  
 五十三世 直左衛門  
 五十四世 直左衛門  
 五十五世 直左衛門  
 五十六世 直左衛門  
 五十七世 直左衛門  
 五十八世 直左衛門  
 五十九世 直左衛門  
 六十世 直左衛門  
 六十一世 直左衛門  
 六十二世 直左衛門  
 六十三世 直左衛門  
 六十四世 直左衛門  
 六十五世 直左衛門  
 六十六世 直左衛門  
 六十七世 直左衛門  
 六十八世 直左衛門  
 六十九世 直左衛門  
 七十世 直左衛門  
 七十一世 直左衛門  
 七十二世 直左衛門  
 七十三世 直左衛門  
 七十四世 直左衛門  
 七十五世 直左衛門  
 七十六世 直左衛門  
 七十七世 直左衛門  
 七十八世 直左衛門  
 七十九世 直左衛門  
 八十世 直左衛門  
 八十一世 直左衛門  
 八十二世 直左衛門  
 八十三世 直左衛門  
 八十四世 直左衛門  
 八十五世 直左衛門  
 八十六世 直左衛門  
 八十七世 直左衛門  
 八十八世 直左衛門  
 八十九世 直左衛門  
 九十世 直左衛門  
 九十一世 直左衛門  
 九十二世 直左衛門  
 九十三世 直左衛門  
 九十四世 直左衛門  
 九十五世 直左衛門  
 九十六世 直左衛門  
 九十七世 直左衛門  
 九十八世 直左衛門  
 九十九世 直左衛門  
 百世 直左衛門

|| は養子

望家となっていく  
 （『本山村誌』）。

松田直市の直左衛門家は七世安右衛門の弟松松が文政三年（一八〇〇）分家して成立した。松松は後に直次郎と改名、忌み名は浄教。以後代々直左衛門と通称した。直次郎は文化二年（一八〇五）から新在家村の酒造柴田長右衛門に見習いとして酒造を学び杜氏となった。直市に



写真2 文政3年に高祖直左衛門が建てた松田家住宅（昭和6年撮影）

よれば初代の高祖直左衛門は、質素勤勉を旨とした人物で、文政三年（一八一二）に居宅と納屋を買い、以後小規模ながら田畑の集積を進めている。文政八年以降文久元年（一八六三）まで、三五回にわたって田畑や芝山を購入し、石高は八石余りに及んだ。また天保八年（一八三七）

にはもう一軒の門のある家を一カ所、弘化三年（一八四六）には居宅兼に隠居所も建てた。二世直左衛門は深江村岡田新左衛門の三男安門を元治二年（一八六一）に養子として迎えた。三世直左衛門も岡田村社人田村早人兼職の次男貞次郎で、明治十七年（一八八四）に養子として入家した。その子が直市である。直市の長男博允氏も伊丹中学（現創立伊丹高校）から御影師範学校を出て教員の道を進み、従って松田直市資料には、博允氏の教育資料や図書も含まれている。

#### 松田直市資料の概略

資料・図書は、郷土資料と教科書など教育資料については、後述のように松田直市の長男博允氏が整理しているが、厳密な分類はされておらず、同じ種類の資料が別のところに紛れている。このため整理にあたっては、資料と書籍に分けて目録を作成した。博允氏が取り上げなかった史料の中にも『西撰大観』などの郷土資料や、松田直市の自筆日記、教科指導などのために松田直市が作成した教育資料がある。

書籍の大半は「日本外史」など近世から戦後までのもので、歴史関係の書籍が多くを占める。「師範」と「御影師範学校」の蔵書印のある本があり、師範学校の統合などに伴って、図書が伝来してきたことが分かる。また残し合のものとして「深江小学校」の蔵書印のある本もある。深江小学校は明治六年（一八七三）ごろに設けられ、明治二十一年に青木小学校と合併して本庄小学校になった。当時の唯一の蔵書である。こうした貴重な書籍を除いては希望する施設や大学に無償で移管する。また尼崎藩札や三田藩札など家伝の紙幣が二三点あった。藩札の一覧は表の通りである。

この松田家の冠婚葬祭の史料や、まだ整理中のものとして、

松田直市収集古紙幣一覧 2016.1.16.永井久美子作成

No.	引替所名	発行年月日	名称	額面	札色	備考
1	尼崎引替役所 泉屋利兵衛	安永6年	銀札	1匁	白	引請人「綱屋平三郎」加印
2	尼崎引替役所 加島屋富三郎	同	同	1匁	茶	引請人「引替 茶屋利三郎」加印
3	尼崎引替役所 野寄正兵衛	天保13年以降	銀札	10匁	茶	引請人「野寄正兵衛」加印
4	同	同	同	1匁	茶	引請人「野寄正兵衛」加印 裏面紙上部「大瀬組」加印押捺
5	尼崎引替役所 野寄與左エ門	同	同	1匁	茶	引請人「野寄與左衛門」加印
6	尼崎引替役所 野寄宗官	同	同	5分	白	引請人「野寄宗官」加印
7	尼崎引替役所 郡家五良兵衛	同	同	1匁	茶	引請人「郡家五良兵衛」加印
8	尼崎引替役所 若林屋嘉兵衛	同	同	1匁	茶	引請人「若林屋嘉兵衛」加印
9	尼崎引替役所 梶右衛門	同	同	1匁	茶	引請人「梶右衛門」加印
10	尼崎引替役所 増田屋太郎石門	同	同	1匁	茶	引請人「増田屋太郎石門」加印 裏面紙上部「大瀬組」加印押捺
11	尼崎引替役所 泉屋利兵衛	同	同	1匁	白	引請人「泉屋利兵衛」加印
12	尼崎引替役所 山本屋卯兵衛・瓦林屋茂兵衛	同	同	1匁	白	引請人「山本屋卯兵衛・瓦林屋茂兵衛」加印
13	尼崎引替役所 野寄宗官	同	銀札 (銭百文)	1匁	茶	引請人「野寄宗官」加印 裏面中央に「銭百文」向裏印押捺
14	尼崎引替役所 平野駒次	同	銀札 (銭百文)	1匁	茶	引請人「平野駒次」加印 裏面中央に「銭百文」向裏印押捺
15	尼崎紙幣局 寛永 大庄屋 岸添吉三郎	明治元年	銭札	100文	白	
16	三田藩 引受所 松尾勘左衛門	嘉永7年	銀札	1匁	白	表裏上部「綱屋崎」角印押捺。二号様式札（摂津国五郡向け通用札）
17	三田藩 引請 米屋善四郎	同	銀札	1匁	白	裏面下段「引請 米屋善四郎」加印。 米屋善四郎は御影の人。 二号様式札（摂津国五郡向け通用札）
18	麻田藩 札役所・引替所 麻田忠左衛門	天保4年	銀札	1匁	黄	
19	八幡 （神戸市） 引請所 吉田善之助	同	銀札	1匁	白	
20	大坂 両替 南都屋安兵衛 菅井屋彦兵衛	文久4年正月	銀札	2分 (酒造合價)	赤	
21	安政6年	安政6年	銀札	1匁	白	
22	浅香宮 （堺市） 引替所 泉屋彦三郎	文久元年	銀札	1匁	白	
23	社役所 中嶋屋稼左衛門	万延元年	銀札	1匁	白	

芦屋や深江に關係する水利關係の古文書の原本が九一点あった。内訳は、水車關係三九点、東川用水二一点、田畑売買・買入關係四二点、訴状二点、芦屋村付洲關係一点、高塚合關係一点、献立一点、老中宛片伊掃部頭書状写し一点、近代文書二一点がある。端裏に二案、左八郎兵衛」などの朱書があるものが少なくな、芦屋市三奈村の左八郎兵衛家文書と思われるが、それ以外の文書が含まれているのかどうか、今後検討していきたい。

(以上文責・大園)

◇  
松田直市の御子息博允氏は直市の蔵書を整理して次のように分類されている。

「守子屋教科書」「小学校・国民学校其他教科書」「中等師範教科書」「郷土資料」「直市大人筆記物」「郷土史資料」「系譜と伝記・歴史地理」「枕詞集覧・史学雑誌」「六華集他」「雑(地区・筆記・観光・ゲーム等)」「大日本史」「明治大正昭和写真」「記念の書画」。

その他に未整理の書籍等がほぼ同量ある。戦前の教科書、郷土資料が主たるもので、他に国史関係書、和歌を主とする文芸書、松田家の系譜等である。

戦前の尋常高等小学校を中心とする教科書が特に目立つものである。それらは文部省編集の教科書のみでなく、出版社や専門家らの編集した検定教科書も含まれている。文部省編集に係るものは明治二十年の尋常小学読本をはじめとして約三十点、民間の検定教科書には明治二十年の池水孝・西村正三郎編高等小学読本をはじめとして約二十点がある。一々の書名は省略するが、各教科の教科書が多く網羅されている。(文責・樋口)

## ひょうしミュージアムフェア二〇一五

史 二 料 館

兵庫県博物館協会に加盟する施設による「ひょうしミュージアムフェア二〇一五」が二〇一五年十月三日と四日の二日間、神戸ハーバーランドスペースアターにおいて開催され二五〇〇人が来場した。今年加盟一四二館の中から一〇〇館が出展、当館も昨年に続き参加した。当館はポスター

展示によるPRと、パンフレット、「まちとくらしのれきし」(子供用パンフレット)、「生活文化史(史料館だよ)」(三七一四三号)、近世史料編、その他の出版物の配布を行った。中でも「まちとくらしのれきし」が人気だった。



写真1 盛況だったフェア

## 深江の村有井戸と NHKドラマ「マッサン」

深江 塾

はじめに

深江の東のはずれにはかつて「深江の財産」としての井戸があった。深江塾で平成二十六年に行った「深江の井戸と人々の暮らし」の調査中に情報を得て詳細を調べた。場所は現在の深江北町一丁目九で、深江の東北の端に位置し北は芦屋市津知町、東は芦屋市川西町に接するところである(図1)。



図1 深江の村有井戸がかつてあった付近図

いつ頃にできた井戸かは不明であるが、戦前から酒造会社に賃貸されるなど、水質のいい井戸だったようである。平成七年一月の阪神・淡路大震災まで存在したが(表紙写真、写真1)、現在は民有地となってその面影はない。現時点で判明する村有井戸の歴史をたどってみよう。

井戸の敷地は明治九年の「深江村地籍図」(神戸市立博物館所蔵)や東灘区役所所蔵の小子図、岡田堯至氏所蔵「深江村地図」などで、



写真1 ありし日の村有井戸  
(1993年4月、藤川祐作撮影)

「字美ノ江」となっており、水路があり小さなため池があった(図2)。かつては用水として利用されたのだろう。「昭和二十二年一月現在深江区有財産」の一覧表(神戸深江生活文化史料館所蔵深江財産区文書、以下「財産区文書と略記」)では「地目溜池」で「水井町三丁目一ノ二」に「村井戸敷地一八坪」がある。区画整理後の図面とも一致している。

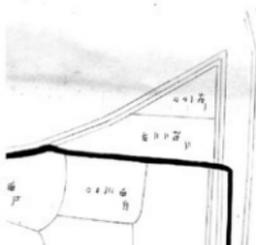


図2 字美ノ江(岡田堯至氏所蔵「深江地図」)

登記簿を確認すると所在地番は昭和四十七年七月に「深江字水井町三



写真2 昭和15年11月30日付の買付契約書

丁目一番」から「深江北町一丁目一八二番」に町名変更されている。また同年七月二十四日に地籍が「二十六」に変更（登記簿には「平方メートルに書替」と記載）されている。

地目は平成十八年九月四日に「溜池」から「宅地」に変更された。震災前までは井戸があり地目は「溜池」であったが、震災後には井戸が埋め立てられ、宅地化されて地目も現状に合わせたのであろう。

平成十八年九月十二日に売買により深江財産区からI氏に所有権移転が行われ、同二十一年相続され、現在に至っている。

## 2 酒造会社との契約

井戸の存在が文書で確認できるのは、昭和十五年十一月三十日付の井戸に関する買付契約書（財産区文書、写真2）である。所有者が「武

庫郡本庄村深江区長中澤伊兵衛」で、相手方は、「武庫郡青木字桑津二五八 摂津酒造工場」となっている。契約期間は、契約日の翌日（昭和十五年十二月一日）から昭和十六年十一月三十日までの一か年、貸賃料は二〇〇円である。昭和十五年の焼酎一八割が二四〇五銭、日本酒一級が二四四〇銭という時代である。

契約書の冒頭に「武庫郡本庄村深江字美の江一番地ニ所在スル区有井戸水使用ニ対シ左記之通り契約ス」として、井戸が深江村の財産であることを明記、「期間中ト雖深江区ニ於テ汲水必用ノ場合ハ何時ナリ共汲水停止」「此場合既納ノ買賃料金ノ返金セス」という条件がついている。

一年後の昭和十六年十一月三十日付の契約書（同文書）は、貸し手が「本庄村深江 深江町内会連合会長志井鉄夫」で、借り手は「本庄村青木字桑津二五八番地 第一酒造株式会社」に変わった。契約期間はやはり一年間、深江の水が必要場合は汲み上げるのを停止する条件は同じながら、賃賃料は三〇〇円に値上げしている。所在地は同一で摂津酒造工場が第一酒造になったことは明らかである。さらに一年後の昭和十七年十一月三十日付でも同じ内容の契約書（同文書、写真3）が締結されている。

聞き取り調査によれば、この井戸から青木の漕工場までは「牛や馬が荷車に水を桶に積んで何台も運んで運んだ」「この井戸水は洗淨水ではなく仕込み水だったと聞いた」という。西宮の地下水が「高水」と呼ばれ重宝がられたが、深江の井戸水も六甲山系の伏流水で水質がよかったのだろう。

## 3 買付の酒造会社はNHK朝ドラ「マッサン」に登場

さて前述した昭和十七年の契約書には第一酒造株式会社の社長が「阿部喜兵衛」と記載されている。阿部喜兵衛は、昭和十五年に契約書をつんだ摂津酒造の社長で、第一酒造は摂津酒造の関連会社で阿部喜兵

商が社長を兼務していたことが判明した。

摂津酒造とは、後にニッカウヰスキー創業者で「日本のウヰスキーの父」とも呼ばれた竹鶴政孝が、大正五年（一九一六）最初に入社した会社である。竹鶴政孝はいうまでもなく、平成二十六年のNHKの朝の連続ドラマ「マッサン」の主人公のモデルで、ドラマでは最初に勤務した会社として「住吉酒造」が登場、社長は西川きよしが演じていた。摂津酒造本社は大阪の帝塚山にあったが、本庄村にはその醸工場があったのである。

摂津酒造醸工場がいつ設けられたのかは定かではないが、「兵庫県酒



写真3 阿部喜兵衛社長の契約書

内工場一覽」昭和三年度、十四年度の各版に、青木に大正七年創業の株式会社第一屋という焼酎・洋酒醸造会社があり、昭和九年十二月の代表者は岩井喜一郎となっている。岩井喜一郎は、明治十六年（一八八三）に生まれ、大阪高等工業学校（現大阪大学工学部）醸造学科を卒業、明治四十二年に合資会社摂津酒造醸造所（後の摂津酒造）に入社、大正九年摂津酒造常務取締役に就任、昭和十二年に常務を退任している。「マッサン」こと竹鶴政孝の大正高等工業学校醸造学科の先輩であり、竹鶴政孝は先輩の岩井喜一郎を頼って摂津酒造に入社したのである。なお第一屋は昭和九年の室戸台風で被害を被っており、当時の写真が残っている（写真4）。

以上のことから摂津酒造醸工場となる前は、第一屋であり、摂津酒造常務の岩井喜一郎が代表者として経営していたことになる。第一屋から摂津酒造醸工場、そして第一酒造へと、戦前目まぐるしく名称を変えたのである。そして昭和二十五年の兵庫県商工部調査による「兵



写真4 室戸台風で打撃を受けた第一屋

庫裏工場名産」には依然第一酒造という会社が存続している。

昭和三十三年に摂津酒造は宝酒造と合併した。また摂津酒造工場と第一酒造の所在地の「木庄村青木字桑津二五八番地」は現在の東海区青木二丁目にあたり、ここには現在「宝酒造白壁蔵」がある。青木にあった摂津酒造工場が、第一酒造を経て宝酒造白壁蔵に引き継がれていることが判明した。

さらに「おうぎのあゆみ」によれば大正七年（一九一六）十二月に朝日酒類株式会社が発立され、焼酎・味酢・洋酒を製造、のち宝酒造青木工場になったと記載されている。

これらのことから、大正九年に朝日酒類株式会社として設立され昭和初期には第一屋となり摂津酒造の傘下に入り、摂津酒造工場、第一酒造と変遷し、宝酒造となったと推測される。

#### 4 戦後の工場水としての利用

酒造会社はいくたびかの変遷を経て存続したが、井戸の利用は途切れたようである。次に井戸の契約が判明するのは戦後のことで、昭和三十八年二月（日は記載なし）の契約書（財産区文書、写真5）がある。契約者は「神戸市東灘区本庄町深江部落会 代表者前中芳太郎」と「芦屋市川西町四番地 弥栄金属株式会社 代表取締役 長瀬源太夫」との間で交わしている。

工場までの井水誘導設備は、弥栄金属株式会社が自己の費用で設置し弥栄金属の所有だった。工場は道路を挟んで北東の芦屋市にあり深江村の井戸から道路の地下を通して水が供給されていた。

井水の使用量に制限はなく毎年一年分をまとめて支払う約定だった。また「本契約は予ねて東亜化学工業株式会社が甲（深江部落会）と契約した使用契約を継承するものであるが、使用料は昭和二十九年度分よりは一ヶ月金一千元に改定する」とあり、弥栄金属株式会社との契約前に「東亜化学工業株式会社」との契約があったこと、昭和二十九年



写真5 戦後は工業用水に使われた契約書

年から使用料が改訂され月一〇〇〇円になったことがわかる。当時からこの近所に住む人は「周り」は殆ど畑であったが、化学工場が操業し



写真6 東洋牧場の景観〔芦屋のうづりかわり〕より



写真7 東洋牧場のパンフレット（同）

ているときは悪臭がひどかった」という。  
 平成二十七年夏、現地調査で弥栄金属株式会社の経営者長瀬源木大氏の娘で、結婚して姓が変わっているが、現在もその一角に住んでいる女性に話を聞くことができた。源木氏は平成六年大震災前に七十六歳でなくなったとい、「父の会社がどんな会社で何を作っていたかはわからない」ということであった。

##### 5 東洋牧場へも給水か

弥栄金属という会社の敷地には戦前に「東洋牧場」があったことが知られ、牧場へも給水していたと言いつづられている。牧場は昭和十

震災でなくなり、登記簿などの記録からも消え、人々の記憶からも遠のいていく。かろうじて残る資料をつなぎ合わせて井戸が重宝がられた時代を描いた。

本稿の調査は、3項を大園正美が、それ以外を森口健一が行い執筆し、深江塾で報告、飯田一雄、松下芳子、増田行雄の助言を得て終止、大園が再構成した。調査にあたっては、藤川祐作氏をはじめとする多くの方にお世話になった。また園田壺至氏には所蔵の「深江地図」の利用に快諾を得た。末筆ながらお礼申上げる。

年の市販の地図にも記載がある。  
 「東洋牧場」については芦屋市のパンフレットにその風景写真（写真6、7）がある。この牧場の経営者の孫で現在すぐそばの芦屋市津知町に住んでいる昭和十五年生まれの女性から聞き取りができた。

この女性によると牧場を営んでいた祖父は「相沢武彦」で「牛を飼っていた。東側でフタも飼っていたが、敷地が自己の所有地であったのか借地であったのかはわからない」という。また飲料水に深江の井戸を利用してはいたかどうかも知らないという。

近所の住人からは「牧場がなくなり工場建設の時にはこの敷地から牛などの骨がいくつか出てきた。牧場で亡くなった牛を埋葬したのも知れない」という話も聞いた。

戦前から酒造会社に使われ、戦後は工業用水として機能した深江の村有井戸は阪神・淡路大



写真1 第一加工場の浜から西を望む。新明和工業の工場が見える  
(西本小太郎氏提供)

の船で家族を単位とした打漁船の漁業と地引網による漁業に分けられました。

深江の漁業は大雑把には、自分の船で家族を単位とした打漁船の漁業と地引網による漁業に分けられました。



写真2 深江浜での地引網漁(昭和14年、福田賢二氏撮影)

地引網によって採れたイワシを商品の煮干(地元の人はいりこといひます)を作るために三つのイワシ加工場があ

り、地引網によって採れたイワシを商品の煮干(地元の人はいりこといひます)を作るために三つのイワシ加工場があ

り、地引網によって採れたイワシを商品の煮干(地元の人はいりこといひます)を作るために三つのイワシ加工場があ

り、地引網によって採れたイワシを商品の煮干(地元の人はいりこといひます)を作るために三つのイワシ加工場があ

り、地引網によって採れたイワシを商品の煮干(地元の人はいりこといひます)を作るために三つのイワシ加工場があ

地引網漁は一年の内のおよそ半年ばかりの季節的な漁です。地引網は地引網船に乗り組む漁師、海岸で網を引き上げる「網引き」と呼ばれる人々(写真2)、水揚げされたイワシを加工場まで運ぶ人、加工場でイワシをゆでる作業やイリコになった商品の袋詰め作業と出荷に携わる人たちが関わりました。複数の作業と人々からなる集団化、組織化、分業化された漁業です。季節の出稼ぎの人もありましたが地元の人々によってこの産業は支えられました。

ただ「網引き」は地元の人でも従事しましたが他所からの出稼ぎ人も少なくありませんでした。その人々の中には「流れ者」と呼ばれる男たちもいて背中に色鮮やかな「刺青」のある人もいました。その人たちは、仕事中はシャツを着て刺青を隠すようにしていましたが汗や塩水でいやでも目につきました。出稼ぎの「網引き」達は普段は網元の用意した宿舎に寝泊まりしていました。海が荒れた日や雨の日には宿舎で「花札とばく」をして時を過ごすことが多かったようです。

## 深江物語(6) 昭和20年代の深江浜を歩く(4)

深江塾 森口健一

魚のにおいに満ちた浜辺

深江の港(本庄港)から右手に海を見ておよそ五〇〇軒を東に向けて歩いてきました。西から戸屋方面に向けて順に磯島、見附、東の各町です。今の町名では南町四丁目、三丁目、二丁目ということになります。深江の浜では、高潮に備えるため、昭和二十六年に防潮堤が造られますが、昭和三十年代までは白い砂浜が広がっていました(写真1)。このあたりに昔から、住んでいる人や家のことを地元の人はいりこを「地(じ)の人間」「浜の人間」と呼んでいました。この集落は南に広がる「チヌの海」(大阪湾)を生活の場とするいわゆる漁師町でした。



写真3 第一加工場（西本小太郎氏提供）



写真4 煙を出しているのが第二加工場、左側が第三加工場（昭和32年ごろ、喜多一晴氏撮影）



写真5 台ばかりでイワシを計量する（喜多一晴氏撮影）

りました。地引網漁は旧本庄村では深江にだけあり、加工場もそうでした。東から順に第一、第二、第三加工場と呼ばれ、第一と第二は東町に、第三は見附町にありました（写真3、4）。

魚崎から西の海辺近くは酒の香りが漂っているとも言われますが、深江の浜は魚の匂いが満ちていました。その原因はイワシの加工場にあります。海の幸を生活の糧とするという意味では、この加工場は深江の南の人々に雇用の場を提供してきました。イワシの加工手順については『本庄村史・民俗編』に詳しく書かれています。重複もありますが、あえて記憶を呼び起こしながら加工場の風

景を記します。

運搬船で運ばれてきたイワシは浜辺で計量され荷担カゴ（ないかご）と呼ばれる竹製のかごに入れられ加工場に天秤棒に担がれて運ばれます（計量器は史料館一階に展示、写真5）。船から荷揚げされてまだ生きているほどの鮮度が求められます。イワシ加工場はいずれも波打ち際から一〇〇メートル離れていません。運ばれてきた生のイワシは水槽に入れられ水洗いされ鱈が洗い流されます。水槽の底には細かい鱈が沈みます。その水槽に蒸籠でイワシをすくいます。その作業は「和紙の紙すき」作業によく似ています（図1）。

一枚の蒸籠にはイワシが重ならないように、しかも蒸籠一面に薄く

広げられます。蒸籠は周り高さ二センチ足らずの木製の枠、底は幅一センチ程度の薄い竹を編んだ網状の器です。イワシが入られた蒸籠は概ね(○)の段階で重ねられたオンパ(写真6)という鉄製の釣り枠に収められ順次「ゆで釜」に送られます。ゆで釜は一般家庭用風呂の湯船の大型のものと思えばよいでしょう。釜の中には大量の塩が入られ煮たてています。その湯船のような釜に蒸籠が入れては引き上げられる作業が繰り返されるのです。ゆであげられたイワシは釜から出されて待機している一輪車に乗せられて次々と天井干しに出て行きます。釜からは強い匂いの湯気がもうもると上がります。ゆであげられたイワ



図1 イワシを洗う図(森口健一作画)

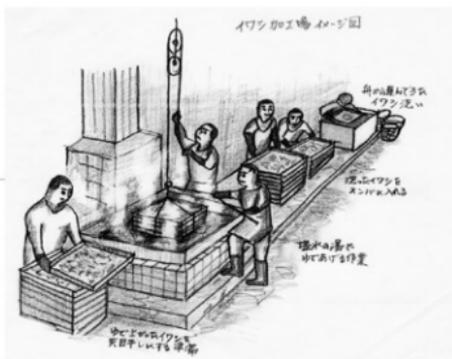


図2 イワシの工場(同上)

ぎ煮(作業に似た面もあり)ます。煮あがったイワシは蒸籠に入れられたまま、工場の外に出されて天井干しにされます。工場付近の砂浜の広場、少し幅の広い道、堤防(防潮堤)の上がその干し場となりました(写真7)。イワシの生の臭い、ゆでる臭い、生臭きの時の臭い、干し上がったときの臭い、それぞれ違った臭いがあります。干し始めのイワシは特に「魚くさい」ものに違いない臭いが満ちているというのはこの時のことを指しています。

午前中の地引網漁の結果、昼過ぎからは砂浜一面、道端などには天

シからは生臭いにおいが湯気と共に漂います。加工場内は生の魚の臭いとゆであげた臭いに満ちています(図2)。このゆでる風景は、明石方面の「イカナゴのく



写真6 オンパと呼ばれる鉄製の吊り枠に収めた蒸籠

日干しの蒸籠がずらりと並び、学校帰りの子ども達の遊び場が奪われました(写真8)。家庭の主婦にとっても加工作業が始まると余計な仕事が増えました。ゆで作業が始まるといずれの加工場の煙突からも真っ黒な煙が出ます。同時にボタン雪のようなヌスが吐き出されたのです。付近の主婦たちは風向きによって自分の洗濯物への影響をみながら取り入れの作業に追われました。今の世ならその匂いと煙、煤で「公害」と騒がれるだろう深江の風物詩です。写真ではうかがい知れない深江浜の一面です。

#### 地引網とイリコと子どもたち

浜の地引網が最盛期になる夏、地引網が浜辺に引き上げられる時になると近所の子どもたちが浜辺にやってきます。運搬船から加工場へ運ぶためにすくい網で運搬用の担いかに移す時、いくばくかの魚が



写真7 堤防の上でゆでたイワシを干す。加工場の煙突から煙が出ている(昭和30年ごろ、喜多一晴氏撮影)

船端にこぼれおちます。その魚を網ですくったり手で捕まえたりするのです。貧しくて食料のために拾うのではなく一種の水遊びのようなものです。

捕まえる魚はイワシではなく小サバ、小アジなどです。男の子はその魚を手で開いて海水でさっと洗って食べたりしました。海の水も昭和三十年代まではそれほどきれいな水でした。

子どもたちにとっては程良く干し上がったイリコはちょっとした午後のおやつになりました。遊びの合間に干してあるイリコをてんでひとつまみ失敗して食べました。地元の良い女性いわく、「深江の子どもが歯が丈夫なのはいつもイリコを食べてカルシウムを十分とっていたから」と。

#### 皇室にイリコを献上した話

平成の今となっては伝説のような話です。深江のイリコが皇室に献



写真8 道端も一面イワシの干場になった(昭和30年ごろ、喜多一晴氏撮影)

上されたのは深江の浜の人たちの自慢話です。

同じ深江の浜でとれるイワシにも季節によってその品質に違いがあります。秋口に水揚げされるイワシは「おんざのじゃこ」と称する最高品質のイリコになります。献上品となるのはこのころのイリコです。「おんざ」の意味は今もよくわかりません。

献上することが決まった時には加工場で働く主だった作業人は「白装束」で作業を行いました。皇室の方々のお口に入る食べ物ですからこの作業に関わる人々にとっては一種の神事にちかい作業であったと思われます。

地引網にはイワシばかりではなく小アジや小サバ或いはサツバと言う小骨の多い小魚も混じります。これらのイワシに混じる魚は「よりもん」といわれて取り除かれます。「よりもん」とは「選（よ）り分けもの」という意味です。「よりもん」が取り除かれ、季節的にも最上のイワシが「おんざのじゃこ」というイリコとなって皇室に献上されたという戦前の話です。

#### イワシの行商の話

採れた鱈はその一部が地元の人たちによって行商の商品となりました。行商の担い手は主に女性で、手押し車にいくばくかのイワシを積み込んで深江の榑葉町（現深江南町二丁目）のお屋敷の人々（サラリーマン家庭が多かった）や芦屋の山手方面まで直接売りに行きました。買手手の夫人たちがボウルなどを手にして集まり、売り手は「チギ」あるいは「チンギ」とよばれる分銅秤で鱈を計り売ります（写真9）。海から上がった数時間以内の仕事です。「深江のチチ喰むイワシ」と呼ばれたのもこのような仕事があったからでしょう。

#### 貝むきの話

農業に農閑期があるようにイワシ加工には地引網漁の閑期があります。その閑期に時折「貝むき」という仕事が飛び込みます。それは



写真9 手押し車にイワシを積み秤で量り売りする行商の女性（昭和20年代後半ごろ、深江の東町で、花谷芳昭氏提供）

ゆで上げられた貝が積み上げられると女性たちがゴム合羽を着てドライバーのような貝むき道具で貝の身を取り出す作業が始まるのです。この貝むき作業が終わると加工場の周囲の空き地は貝殻が山積みとなっており、まるで貝塚を思わせるような風景でした。

#### 太田造造・迎賓館

深江南町二丁目の東外れの海岸に清酒「道灌」で知られる「太田酒造酒造所」があります。今日では第四工区内を除けば深江で唯一の酒造会社であり工場です。

「道灌」と「太田」という名の通りこの会社のルーツは一五世紀半

地引網ではなく打漁船の漁によって採れた「サルボウ貝」（ツメ貝）の皮むき作業です。イワシの漁の終わって寒い季節で地元の主婦のアルバイトでした。



写真10 大田酒造迎賓館での深江塾の見学会（2010年11月20日）

と一言歌と共に山吹の一枝を差し出しました。道灌はその山吹に込められた少女のなぞがわからず、後にそれが古歌に寄せられたものであることを知りました。「みの」は「実」であり「實」で、掛詞に寄せて自らの貧しさを詠ったのです。道灌は自らに無知を恥じてその後、歌の道にも励み文武両道の武將となりました。この道灌の

ば（室町時代）に関東で活躍した太田道灌という武将にあります。太田道灌は「築城の名手」とも書かれています。「江戸城」のもとになる城を築いた人で、「山吹の里」の逸話で知られています。道灌が狩の帰路雨に打たれて立ち寄った農家で、出てきた娘に「實（みの）を借りたい」と言ったら、その娘は

七重八重 花は咲けども 山吹の  
みのひとつだに なきぞ悲しき



写真11 1階の洋室



写真12 2階には和室もある

系譜を引くという太田家は、近江（滋賀県）で江戸末期に良質の近江米をもとに酒造りを始めました。昭和三十一年（昭和三十七年という記載もあり）に、軒余曲折の末、酒の本場である灘五郷の一角にある深江の地に工場を完成させました。現在の工場長である北尾龍俊氏は、「灘の辛口の酒がどうしても造りたかった。神戸に進出する許可を得るために、灘の酒造組合との協議が度々行われて結構苦労した」といいます。

工場の敷地はおよそ二〇〇坪。東に海浜別荘（現在の太田酒造迎賓館。西は通りをはさんで第一水産加工場。南は海岸、北は一部が畑として利用されていました。敷地全体は畑として利用されている部分以外は海岸の砂浜とおなじ質の砂でした。

現在の迎賓館は工場敷地と一体になっています。工場が出来るまでは、それは広場の東端に孤立して建っているように見えました。建築史家の川島智生氏の研究や地元の人々の話によれば、この建物は昭和の初期に大日本紡績の役員であった小寺源吾氏の海浜別荘として建築されました。現存する太田酒造の迎賓館は昭和九年の室戸台風によって

破損し、昭和十年頃に再建されたものです。

深江南町地区は、迎賓館の場所が最も高くなっています。同時に迎賓館は波打ち際に面しているため、敷地の南側全体と東側には石垣が組まれています。その高さはおよそ二メートルです。現在のように埋立地が出来るまでは台風が来る度に大きな波が防潮堤にぶつかり、迎賓館全体に波しぶきに包まれている風景が見られました。迎賓館がこのような海辺に接していないが、健在なのは高い敷地と石垣に守られてきた結果といえましょう。

迎賓館の敷地西側は南北に高さ二メートルのモルタル仕上げの塀があり、その外は昭和二十年代初めころまでは砂地の広っぱでした。広っぱには塀に沿って地面に這うように、淡いピンク色の花を付ける浜ヒルガオが一面に生えていて単調な砂浜に色を添えていました。この原っぱは一部畑でしたが、子どもたちにとっては格好の遊び場で、風揚げ、模型飛行機飛ばし、野球など、広い場所が必要な時にはここに集まりました。季節によってはイワシの干場にもなりました。

迎賓館から西にむかって、戦前には隣接して「深江文化アパート」があり、その西が長谷川別邸、中村邸などの海浜別荘が立ち並んでいました。文化アパートは昭和九年の室戸台風の高潮で被害を受け廃業しましたが、地元の人々が「洋風仕出し屋」と呼んだ宿泊設備を整った建物でした。昭和十三年度本庄小学校卒業生がその記憶に基づいて作られた地図では「松浦文化ハウス・洋風仕出し」と記載されています。このレストランにはいわゆる深江文化村に集った白系ロシア人を中心とした音楽家たちがよく利用したといひ、「深江文化村」と切り離せない存在です。

#### 深江の造船所

迎賓館の東は、現在は暗渠となっていますが、深江では高橋川に次いで流れの豊かな津知川が流れています。この川の河口に沿って東に

敷地が約四〇〇坪の造船所がありました。地元では「深江の造船所」とよんだ「東神戸造船所」で、昭和十八年に設立され、昭和二十五年親会社である株式会社上組から分離独立して東神戸造船鉄工となりました。

戦時中は九州から神戸に物資を運ぶ運搬船を作ったり修理をしたりしていました。船は全長一〇メートル、幅五メートルのずんぐりした木造船で、エンジンはいりません。深江ではこの船を「ドン舟」と言っていました。ドン舟には船尾に小艇のような簡単な住居が付いている船もあります。これは船が瀬戸内海を西に東に幾日かけて行き来するため、水上（船上）生活のための設備なのです。ドン舟は何隻かがエンジン付きのボンボン船にひかれて深江の沖を西に東にゆったりと動いている風景が毎日のように見られたものです。海の貨物列車といった風情です。

造船所には五つの船台があり、半分くらいが常時稼働していました。工場床は海に向かって緩やかに傾斜し、船台の下には電車道のように五セットの二本のレールが海の底まで伸びていました。レールの上には台車がありその上に修理中の船や新造中のドン舟が乗せられました。船が完成したり修理が完了したりすると船台ごと海に向かって進水させます。

工場西側は津知川河口で昭和三十三年に防潮堤と津知川水門が出来るまでは、河口から舟に使用する木材を敷地内に引き上げていました。木材は九州方面からドン舟ではるばる運んできたものです。

造船作業には専用の大きな鉄釘が使用され、工場の隅には使用済みの釘が置いてありました。鉄クズとして処分を見えはからってでしょうか、地元の子どもたちは仕事のない日や時間を置いながら敷地内に入り込んでボケットいっばいに船釘を失散しました。仲間ですれを集めては「ヨセヤ」に持ち込んで買い取ってもらいました。「ヨ

セヤ」というのは一種の古物商のことです。現在ならば金属専門に取り扱う資源回収商でしょう。昭和二十五年の朝鮮動乱以後金属類は高騰し金属専門に扱う古物商は大もうけしたのです。深江でも魚を運ぶオート三輪を金属運搬車高として使用しちょっとした財をなした人もありました。子どもたちはヨセヤに持ち込む金属類のことを「アカ・シンチュウ・ボロ」（銅・真鍮・鉄のこと）と買取価格の順に序列をつけていました。このお金は子どもたちの草野球のボール代になったのです。昭和二十六年から三十年頃の話です。

工場の北には製材所と事務所があり、船の設計図の製作等をしていました。敷地内には社宅がありました（筆者の同級生で松岡君という同級生が任んでいます）。工場の様子はこの松岡君の家遊びに行っていた時の記憶が役に立っています。

工場の敷地の一部は昭和二十年代後半には、モーターボートの置き場として「保管場所代」を得るようになりました。このころ造船所西側の太田酒造の工場敷地と迎賓館になっている敷地、および（〇〇〇坪を買わないかという話が造船所に持ち込まれました。坪あたり七〇〇円という値段で、値段が合わなかったのか造船所の資金的な問題からは不明ですが、この商談は立ち消えとなりました。

その後昭和三十年頃、太田酒造がその土地を取得して現在に至っています。

◇  
原稿作成に当たって、太田酒造の北尾龍俊氏、東神戸造船所の前田光一氏をはじめ、地域の方々には座談による聞き取りに協力いただきました。末筆ながら記して感謝申し上げます。

## トライやるウィークと史料館

史 料 館

中学二年生の恒例の年中行事トライやるウィークを、平成二十七年度も深江会館及び史料館で受け入れた。六月一日、二日は深江会館で、四、五日は史料館の樋口元巳、藤川祐作が担当した。本年度は本庄中学校六十九回生二年生三宮悠介君と松村駿君の二人だった。

史料館では例年通り展示中の道具類の使用法について説明し、「生活文化史」発送の封筒詰めや夏の風物詩の展示替えを行ってもらった。

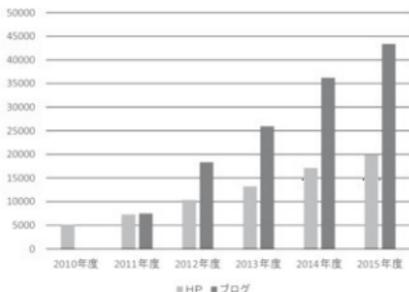
松村君は礼状に昔のかき水機を展示したことが印象に残ったと書いていた。二日目は弥生土器の土器洗いを体験してもらった。土器片について砂をブラシで取る作業で三宮君は「手が痛くなるほど集中した。集中すると効率も上がることを経験した」と感想を述べていた。続いて瓦に押されている刻印や古銭の文字の拓本を取る体験も行った。拓本も上手に仕上がった。

展示ケースに納まっている歴史遺産に直接触れる体験は得難いもので、史料館で書いた感想文には三宮君（写真①）は「すごく楽しかった」、松村君（同②）は「普段は体験できないことができてよかったです」と書かれていた。



## 二〇一五年度のWEBサイトアクセス状況

史料館研究員 高田 祐一



史料館 WEB サイトアクセス数の推移 (累積)

史料館では、情報発信のツールとして Web サイトとブログを運営している。Web サイトとブログへのアクセス状況を報告する。

二〇一六年二月二日時点で Web サイトへのアクセス数が、サイト運営開始時からの累積で一九九二二となった。ブログは累積のアクセス数が四三四二二アクセスとなった。二〇一〇年度からの推移は図の通りである。二〇一三年一月から SNS (Facebook) を運用している。Facebook は、双方向性が可能なブッシュ型の発信スタイルとして史料館の情報発信に貢献している。

Web サイトで公開している「史料館だより」のダウンロード数が累計一四六五件となった。「史料館だより」をいつでもどこでも閲覧できる環境提供に寄与している。

二〇一五年度も時代に合わせた情報発信を考え、継続的な改善に取り組みたい。

## 再び史料館にかかわって

史料館研究員 潮崎 孝代

二〇一五年の十二月から史料館運営に参加させてもらうことになりました。私は神戸地下街の社員で、一九七九年の入社時からさんちゃんにあった「インフォメーション」さべ市政・余暇コーナー」を職場としてきました。市の広報番組「サンデー神戸」出演や、消防局の機関誌「雪」やミニコミ誌などへの連載もしています。

史料館との関係は古く、仕事を通じて出会った田辺眞人先生や道谷卓副館長に誘われ、一九八一年発足の史料館友の会に参加。史跡散策やバスツアー、講演会の受付をお手伝いし、一九九五年に解散する時には会計でした。

友の会に関わるまで、私は日本史が苦手でした。源氏と平家のどちらが勝ったのか、太平洋戦争はどこと戦ったのかさえ理解できていない極端な歴史音痴でした。が、神戸市の総合的な窓口であるインフォメーションこうべには、市民や来街者から様々な質問が寄せられます。「二ノ谷の合戦の場所は？」「神戸の開港が遅かったのは何故？」等。最初の頃は、関連の本を読んで調べたり図書館に照会して聞いたりしていました。

しかし、いくつ日本史に疎い私でも、一四年近くも史料館の歴史関連の散策や講演会に参加して、興味をそそる軽妙な語り口の田辺先生や道谷副館長の固切れよく分かりやすい講座を聞いていた内に、ちょっとした小さな知識が蓄積されていたようでした。いつの間にか、歴史が苦手ではなくなっている自分に驚いています。

史料館の運営に関わらせてもらうことで、今度は、もっと興味を持って歴史とちゃんと向き合っていきたい、と思っています。

## 史料館日誌抄

史料館副館長 道谷 卓

二〇一五年四月～一六年三月

〇二〇一五年〇

- 4月24日 芦屋公民館・町歩きの会 (見学者 二五名)
- 4月25日 東灘区長来館
- 5月20日 大阪大学大学院文学研究科日本史研究室 (見学者 六二名)
- 5月31日 史跡・戦跡めぐりの会 (見学者 二二名)
- 6月4日 / トライヤル・ウィーク・本庄中学校二年生二名を受け入れ
- 5日 二日間史料館業務の体験 (見学者 四四名)
- 6月26日 東灘区役所職員研修 (見学者 一〇名)
- 8月8日 國學院大學 (見学者 四四名)
- 9月5日 古田史学の会 (見学者 一六名)
- 10月3日 / ひょうごミュージアムフュア(神戸ハーバーランド) 4日 (見学者 一六名)
- 10月9日 西灘小学校 三年生 (見学者 八六名)
- 10月15日 六甲小学校 三年生 (見学者 五八名)
- 10月29日 本山第二小学校 三年生 (見学者 二〇三名)
- 10月31日 本山東児童館・親子見学 (見学者 一〇三名)
- 11月15日 甲南女子大学 (見学者 七名)
- 11月30日 生活協同組合コソコソ (見学者 四二名)
- 12月10日 大沢小学校・八多小学校 三年生 (見学者 二八名)
- 〇二〇一六年〇
- 1月12日 港島小学校 三年生 (見学者 九五名)
- 1月14日 甲南小学校 三年生 (見学者 六二名)
- 1月18日 向洋小学校 三年生 (見学者 一八名)
- 1月20日 福池小学校 三年生 (見学者 一四二名)

- 1月21日 本山南小学校 三年生 (見学者 九九名)
- 1月22日 本庄小学校 三年生 (見学者 二四名)
- 1月25日 磯田小学校 三年生 (見学者 九九名)
- 1月26日 中央小学校 三年生 (見学者 一〇四名)
- 1月27日 本山第三小学校 三年生 (見学者 一五二名)
- 1月28日 摩耶小学校 三年生 (見学者 六五名)
- 1月29日 灘小学校 三年生 (見学者 六七名)
- 2月2日 御影小学校 三年生 (見学者 一〇七名)
- 2月4日 東灘小学校 三年生 (見学者 一八三名)
- 2月9日 六甲アイランド小学校 三年生 (見学者 五二名)
- 3月2日 福住小学校 三年生 (見学者 七九名)
- 3月12日 神戸新聞カルチャーセンター1 (見学者 四〇名)

## 資料寄贈者ご芳名

(敬称略 二〇一五年四月～一六年三月)

高井昭十三・鈴置二郎・佐原浩平・森沢達夫・福田謙一郎・松井美子 (藤川祐作記)

## 編集後記

「本庄村史」を最初に手掛けた松田直市に関する発見や、深江の村有井戸がNHKドラマのモデルになった酒造会社に貸与していたなど、今年度も新しい調査報告をまとめることができました(大困)。

『生活文化史』 第44号 2016・3・31

編集／大國正美

発行／神戸深江生活文化史料館

〒658-0021 神戸市東灘区深江本町3-1-17

☎ 078-145314980 (FAX兼用)

http://homepage2.nifty.com/tukae-museum/